

問題 1

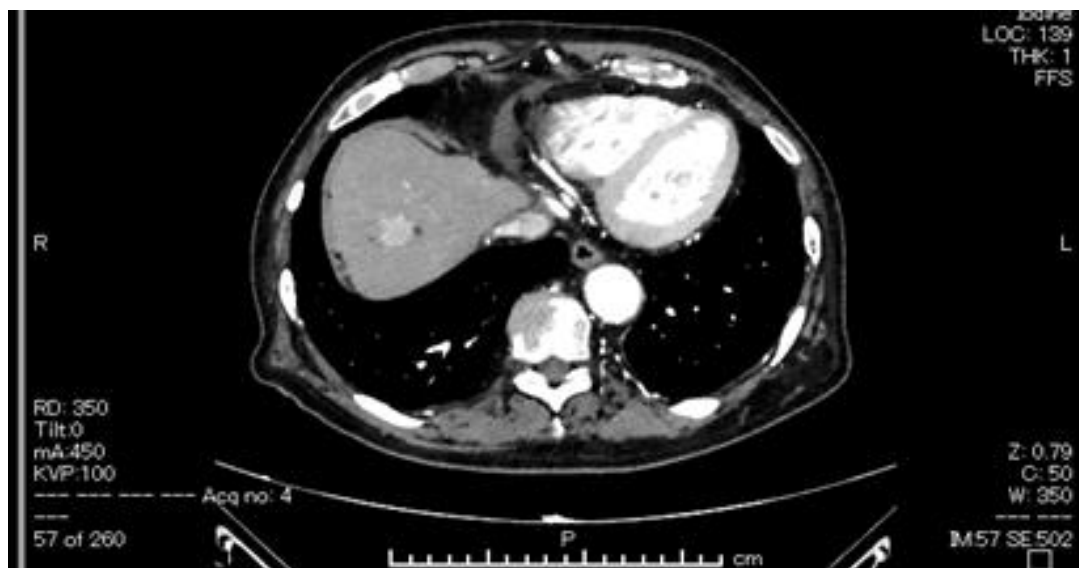
89 歳男性。C 型慢性肝炎のウイルス学的著効達成（SVR）後にて半年毎に外来フォローされていた。X 年 4 月に超音波内視鏡検査にて肝に 16×12 mm の低エコー域を認めた。

X 年 5 月に造影 MRI で 14mm の T2WI で淡く高信号、肝細胞相で低信号を認める病変が確認された。多血性の病変であり、高齢であったため 15 mm 以上でエコーにて示視可能となるまで多血性 HCC 疑い経過観察の方針であった。X+1 年 3 月 dynamic CT にて腫瘤が 18 mm に増大しており、早期濃染→wash out を認めたため治療目的で入院となった。

【血液検査所見】 白血球 6720/ μ L、赤血球 405 万 / μ L、Hb 13.4 g/dL、Ht 40.1 %、血小板 14.4 万 / μ L、APTT 30.9 秒、PT% 103%、血漿総蛋白 7.4g/dL、アルブミン 4.0g/dL、AST 30 U/L、ALT 20 U/L、LD 280 U/L、ALP 27 U/L、 γ -GT 42 U/L、BUN 17 mg/dL、Cre 0.62 mg/dL、NH₃ 34 μ g/dL、Na 138 mmol/dL、K 4.2 mmol/dL、Cl 105 mmol/dL、総ビリルビン 1.2 mg/dL、直接ビリルビン 0.1 mg/dL、CRP 0.14 mg/dL、AFP 2ng/mL、AFP-L3% <0.5 %、PIVKA II <15ng/mL、HBs 抗原(-)、HCV 抗体(+)、HCV-RNA 検出せず

(1) 造影 CT と血管造影の画像を以下に示す。病変が認められる肝区分は次のうちどれか。

- a. S1
- b. S3
- c. S4
- d. S6
- e. S8



(2) この患者の Child-Pugh 分類は A であり、ラジオ波焼却療法 (RFA) が行われた。
肝予備能 Child-Pugh 分類 A,B に該当する患者で、RFA を施行するのに適さない所見を以下から **2 つ** 選べ。

- a. 腫瘍数 4 個
- b. T-Bi 値 3.1 mg/dl
- c. 脈管浸潤あり
- d. 腫瘍径 2.8 cm
- e. ICG15 分値 30%

問題 (1) S8 (2) a.c 肝細胞癌治療アルゴリズムを参照

問題 2

【主訴】 ふらつき、黒色便

【現病歴】

79 歳男性。X 年 11 月より毛細血管拡張を伴う小腸出血で多数の入院歴がある。出血点は毎回トライツ靱帯付近で、毛細血管拡張を含む血管病変に対しアルゴンプラズマ凝固 (APC) やクリップによる止血を繰り返していた。X+4 年 3 月にふらつきを主訴に外来を受診した。

眼瞼結膜は軽度貧血様であるが眼球結膜に黄染を認めない。

腹部は平坦で、筋性防御はない。脈拍 97/分、血圧 81/51mmHg、体温 36.7℃

【血液検査所見】 白血球 5000 / μ L、赤血球 158 万 / μ L、Hb 4.5g/dL、Ht 15.6 %、血小板 12.0 万 / μ L、APTT 37.3 秒、PT% 99 %、血漿総蛋白 5.8g/dL、アルブミン 2.7 g/dL、AST 25U/L、ALT 12U/L、LD 131 U/L、BUN 50 mg/dL、Cre 1.60mg/dL、Na 139 mmol/dL、K 4.6mmol/dL、Cl 107 mmol/dL、CRP 0.16 mg/dL

【既往歴】

小腸出血、肝硬変、胃静脈瘤、直腸静脈瘤、掻痒感、右内腸骨動脈瘤、陳旧性心筋梗塞、2 型糖尿病、CKD、高脂血症、高血圧症

次に行うべきはどれか **2 つ** 選べ

- a. 輸血
- b. 造影 CT
- c. 開腹手術
- d. 上部消化管内視鏡
- e. 腹部エコー

上部消化管内視鏡にて同部位からの出血を認め APC を施行した。

患者の経過に対する治療方針として **適するものはどれか 2 つ** 選べ。

- a. 度重なる再出血によりオスラー病を疑い患者の同意を得ず遺伝子検査をした。
- b. 入院中再び黒色便が出現し、Hb8.0→6.5 に低下したため輸血を開始した。
- c. 退院 2 か月後コップ 1 杯の吐血があったため救急外来を受診した。意識脈拍 124/分、血圧 76/60mmHg、呼吸数 20 分、既往歴から出血性ショックと判断し、ルートを取らずに緊急内視鏡を開始した。
- d. 再出血のリスクを鑑みて、陳旧性心筋梗塞が既往歴にあるが抗血小板薬は free でフォローした
- e. 入院中再出血したため原因不明消化管出血 (OGIB) として小腸カプセル内視鏡を行った。

問題 1 a.e

問題 2 b.d

- a.出血を繰り返しており既往歴からも静脈瘤が疑われるため不要。
- b.消化管出血における輸血では Hb が 6 以下になった時或いは Hb7 以下になり、今後も低下が考えられる場合に行う。
- c.出血性ショックではルートを取ってから緊急内視鏡を行う
ルートを取らない状態では相対禁忌となりえる
- d.この患者の実際の経過である
- e.OGIB では小腸カプセル内視鏡が適応になるが、この患者では同部位の繰り返す出血で治療を受けており、今行う検査ではない